

## ヘブル人への手紙1章 「御子の輝き」

### 1A 御子という神のことば 1-3

1B 預言者によることば 1

2B 万物の相続者 2-3

### 2A 御使いよりすぐれた方 4-14

1B 子としもべ 4-6

1C 父より生まれた方 4

2C 御子への礼拝 5-6

2B 王としもべ 7-12

1C 油注がれた王 7-9

2C 天地の一新 10-12

3B 奉仕する霊 13-14

## 本文

ヘブル人への手紙を見て行きます。私たちは、パウロによる手紙をローマ人への手紙から、ずっと見て行きました。この前のピレモンへの手紙で、それが終わります。実は、このヘブル人への手紙も、パウロによるものではないかと私は感じていますが、伝統的にパウロとされています。しかし、文中に、明らかにパウロが自分が書いたとする手紙は、ピレモンで終わりです。

そして、ヘブル人への手紙ですが、これは読んで字のごとく、「ヘブル人に対して書かれた手紙」です。ヘブル人とは、イスラエルの人たちがエジプトで奴隷であった時から使われていた呼び名です。アブラハムが、ウルの町で主に呼び出され、主が示される地に行きなさいと言われたので、ユーフラテス川を越えて、カナンの地に入ってきました。それで、「川向うから来た」という意味の言葉が派生して、ヘブル人と呼ばれます。そして後に、ヤコブに与えられた新しい名、イスラエルの子らと呼ばれるようになります。そして、バビロンに彼らが捕え移され、ユダ族を中心にする人々が帰還して、エルサレムを再建します。その頃から、ユダの人々、つまりユダヤ人と呼ばれるようになります。けれどもすべて、同じ人々のことを指します。

この手紙のすばらしさは、御子イエスの姿が、ユダヤ人たちの信じているユダヤ教の中で明らかにされていることです。主が、預言者たちによって明らかにしてくださったご自分の姿は、ユダヤ人たちの信仰によって守られてきました。ユダヤ人は、与えられた律法を守り、神殿を建て、礼拝を献げてきました。それらの律法や預言が、キリストを前もって証していました。そして実体であるキリストが来られたのです。このイエスこそが、イスラエルの人たちが長年、待っていた、すべてのことを明らかにされる方、メシアであります。私たち異邦人は、いわば、ユダヤ人が二千年近く

かけて、示されて行って、その中で生きてきたその証しを、まるで、長い期間をかけてようやく出来上がった極上の料理を、そのまま無償でいただいている、というような恵みにあずかっています。

ところが、イエスが世に現れ、弟子たちの間で信じられ、聖霊によって教会が生まれました。けれども、その時は同じように、ユダヤ人信者も神殿で礼拝を献げていたのです。教会が生まれてしばらくした後に、「使徒 3:1 ペテロとヨハネは、午後三時の祈りの時間に宮に上って行った。」とあります。彼らは、ユダヤ教徒として、きちんと神殿で礼拝を献げて、また律法も守り行っていたのです。パウロを始めとして、聖霊の働きが異邦人に広くいきわたった後も、エルサレムではユダヤ人の信者は、神殿礼拝を献げていました。エルサレムの教会の指導者たち、ヤコブなどが、「使 21:20 彼らはこれを聞いて神をほめたたえ、パウロに言った。「兄弟よ。ご覧のとおり、ユダヤ人の中で信仰に入っている人が何万となくいますが、みな律法に熱心な人たちです。』」

けれども、この神殿礼拝は間もなく終わりを告げます。イエス様は、エルサレムに入られてから、この神殿が崩壊することを告げておられました。神殿の荘厳さをほめていた弟子たちに、「この大きな建物を見ているのですか。ここで、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。(マルコ 13:2)」そして紀元後 70 年に、ローマによって神殿が破壊され、ユダヤ人は捕虜となり、その時から世界流浪の民となったのです。

しかし、神殿がなくなったとて、イエスは生きておられます。この手紙の最後のほうに、著者は「イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。」と書いています(13:8)。ここがこの手紙のテーマです。ユダヤ教の神殿が破壊されても、しかし、神殿よりもすぐれた方を私たちは信じているのだ、ということです。この方がおられれば、神殿なしでも礼拝ができる、いや、霊とまことをもって礼拝する事こそが、真の礼拝なのだということです。イエス様が、サマリアの女に、「御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。」と言われたとおりです(ヨハネ 4:23)。

そしてヘブル人への手紙を読みますと、信仰から離れることへの警告が書かれています。ユダヤ人の人たちは、イエスを信じることによって激しい迫害を受けていました。それで、この方を告白すること、またイエスの御名によって集まることを避けるようになっていきました。他のユダヤ人と同じように、神殿礼拝を献げ、また律法を守ることによってイエスをあがめていけばよい、という感じになっていたのでしょうか。しかし、そのような埋没した信仰は、結局、イエスに対する信仰と確信からも、離れて行ってしまふよという警告です。

私たちも、今の生活の中で信仰が埋没する危険にいつも置かれています。無理に、主イエスを告白することなく、主の御名で集まらなくても、心に信仰をしまっていればそれでいいのだ、と、今の生活を安定させることを優先させる誘惑があります。けれども、その、いわば「プライベートにした信仰」といったらよいのでしょうか、告白もせず、集まりもしない信仰は、信仰そのものではなくなる

のだ、という警告ですね。互いに励まし合い、愛と善行を勧めて、集まって、主を仰ぎ見ようという勧めが、手紙の後半に出てきます。

### 1A 御子という神のことば 1-3

では、本文に入りたいですが、今までのパウロによる手紙の、挨拶文がありません。そのまま、御子に関する教えから始まります。

#### 1B 預言者によることば 1

<sup>1</sup>神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました、

午前礼拝で見えてきましたように、ユダヤ人の利点は、神のことばを任されたところにあります。彼らにあって、異邦人になんか恵みは、主ご自身が語りかけてくださるということです。神を、そのようにして、はっきりと人格的に知ることができるということです。

預言者、つまり神のことばを預かった人々によって神が語られてきました。そして、それが時代ごとに、徐々にご自身の計画を明らかにして、そして、幻や夢、御使いなど、いろいろな方法によって、語られてきました。ですから、みなさんが旧約聖書を読まれる時、そこに鮮やかな、神の細やかな配慮を見ることができると思います。こんなになぜ、話がつながっているのだろうか？と驚かれると思います。それは、神が意図的にそうされたのです。

#### 2B 万物の相続者 2-3

<sup>2a</sup>この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。

預言者たちによって、綿々と語られ、預言の幻が飽和点に達したその時に、主は、バプテスマのヨハネを遣わされました。そして、「神の国は近づいた、悔い改めなさい。」とヨハネが説いていきます。神の国が近づいたという、終わりの時に入ったのです。そして、ヨハネが、もう来っていると告げていた方、キリストが自分の目の前に現れて、彼にバプテスマを授けたところ、天から声がして、「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」と告げました(マタイ 3:17)。この方ご自身が、神の究極のことばとなり、私たちに語ってくださるのです。

私たちは、自分の信仰を複雑にしてしまいます。その時のユダヤ人と同じように、人の教えにすぎない、いろいろな決まり事で、イエスご自身を見ることが出来なくなっていました。安息日についても、弟子が畑の麦の穂を取って食べたのを、安息日の働くな違反しているとしましたが、イエス様は、「人の子は、安息日の主です」と言われたのです。そうした、些細な規則に囚われて、肝心の、律法と預言者に証しされていた方、主ご自身を見ていなかったのです。私たちも同じようにして、そんな難しくないこと、イエス様だけなのだということから目を離して、物事を複雑にしてしま

います。イエス様から目を離してしまいます。

そして、その時から今に至るまで、終わりの時なのです。私たちはいつも、この方がすみやかに戻って来られて、この地を回復してくださることを願っています。その時に、すべてが完了します。永遠の都において、神と子羊を礼拝して生きるのです。

<sup>2b</sup> 神は御子を万物の相続者と定め、御子によって世界を造られました。<sup>3a</sup> 御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。

御子が、神の御子であり、ゆえに万物の相続者であることを語っています。午前礼拝でも話しましたが、日本の人々には、「神は漠然と信じているけれども、なぜイエス・キリストなのか？」という疑問がありますね。けれども、神は天地を造られた方であり、この方には独り子がおられるということが分かれば、自ずとイエスを主と信じる必要があるのだと分かります。私はその一人でした。飛行機で半日飛んでいくようなはるか遠いところにいた人、しかも二千年前の人に、なぜ自分がいのちを献げる必要があるのか？と思ったものです。しかし、永遠の神がおられて、その方の独り子であるならば、二千年を越えた、極東に生きるこの自分を知っておられることが分かりました。

日本人だけではなく、確かに、他の宗教がイエスは教師であったり、預言者であるけれども、神ご自身であるというところで、つまずいています。イスラム教は、イエスが預言者であると信じています。けれども、神には息子はいないといって、真つ向からイエスが神の御子、神ご自身であることを否定しているのです。今のユダヤ教は、イエスのことを無視している状態ですが、一部には、イエスはユダヤ教の教師として受け入れている人々もいます。しかしラビにしすぎません。なぜ、人を神にするのか？という疑問があります。かつてのユダヤ人指導者たちが、つまずいたのと同じです。良い行いをイエスはするし、神のことばも告げているが、しかし、自分と神と同等にすることは、冒瀆であるとして、それでイエス様を死刑に定めたのです。

しかし、聖書はこの方が神の御子であり、創造主ご自身であることを教えます。そして、神の栄光の輝きです。ヨハネは福音書で、1章14節で、ことばが人となって、私たちの間に住まわれた、と言って、それから、「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である、この方は恵みとまことに満ちておられた。」と証言しています。ユダヤ人たちは、かつて幕屋あるいは神殿で、至聖所に入って、神の栄光に触れました。それが、肉体を取られたイエスご自身において見ることができ、そこには恵みとまことが満ちているとヨハネは言っています。この方を通して、私たちは神の栄光を仰ぎ見ることができます。

そして、この方は、神の本質の完全な現れです。ピリポへの答えが、「わたしを見る者は、父を見たのです」というのが、それに当たります。神の本質を、その肉体の制限の中にながらも、完

全に現わしておられたのです。

そして、「その力あるみことばによって万物を保っておられます」というのが、とても興味深いです。イエス様が、万物をその力あるみことばで保っておられます。主は肉体を取られた時に、その力あるみことばを、少しお見せになりました。教えられた時には、権威がありました。そして、悪霊につかれた者から、出て行けと命じられて、悪霊が出て行きました。それで、人々が、その教えに驚嘆したことが書かれています。弟子たちには、ガリラヤ湖が荒れているのを、制したお姿を見て、この方はいったい、何なのだろう？と恐れたことが書かれています。力あるみことばなのです。

しかし、主はその力を、再び戻られる時に十分にお見せになります。世界中から軍隊がエルサレムに攻めてきます。しかし主が天から来られます。白い馬に乗っておられて、「神のことば」と呼ばれています。そして、「この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。」とあります(黙示 19:15)。主は万物を、そのことばにとって力強く保っておられ、それをご自身が戻られる時には、反抗する、獣が率いる諸軍隊に対して用いられるのです。

<sup>3b</sup> 御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。

この言葉が、ヘブル人への手紙の大きな部分を占めます。罪の清めは、大祭司が年に一度、イスラエルの罪のために、至聖所に入って行くことです。宥めの日、贖罪日ですね。しかし、イエスご自身が偉大な大祭司として、ご自分の血を献げ、それによって私たちの罪を良心から清めて下さり、それで天に入ることができるようにしてくださいました。

そしてイエス様は、大祭司であられるだけでなく、いと高き所の、大いなる方の右の座に着いておられます。つまり、王であられます。王であり、かつ祭司である方が、私たちを執り成してくださっている、というのが、ヘブル書の大きな流れになります。神殿礼拝が近いうちに、なくなってしまう中で、イエスのなされた贖罪がいかに偉大であるかを、著者は教えます。

## **2A 御使いよりすぐれた方 4-14**

### **1B 子としもべ 4-6**

### **1C 父より生まれた方 4**

<sup>4</sup> 御子が受け継いだ御名は、御使いたちの名よりもすばらしく、それだけ御使いよりもすぐれた方とされました。

ヘブル人への手紙は、御子がいかにすぐれているかということをお話していきます。ユダヤ教が大切にしているものを、取り上げて行きます。初めは、ここにあるように御使いよりもすぐれていることです。そしてユダヤ人にとってモーセは、最も大切な預言者です。彼よりも、すぐれていると説き

ます。そして、アロンの祭司職は礼拝において必須です。けれども、イエスはアロンの祭司職よりもすぐれている祭司とされていることを話します。そして、すぐれた新しい契約があります。そして、聖所は地上では模型で、天にまことの聖所、すぐれた聖所があることを話します。そしてこの方の流された血が、雄牛ややぎよりもすぐれていて、私たちを良心の汚れから清めるとします。そして、この方こそが私たちの希望であると結論づけるのです。

そこで、御子に与えられている名が、御使いたちの名より、すぐれているというところから、話しています。今、3節で、「いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました」と言っていましたね。御使いは、聖書のある箇所では神々(エロヒーム)とまで呼ばれており(詩篇 97:7 等)、権威と力ある存在として登場します。主なる神がおられるところに、神々、あるいは星々ともありますが、集まって、神のところで会合を開いているような箇所まであります(イザヤ 14:13)。

ダニエル書では、ペルシアの君、ギリシアの君など、大国の背後に、墮落した天使が動いていることも書かれています。律法をモーセに与えたのも、御使いによることも言及されています。御使いは、光り輝き、力ある存在として登場します。ですから、異端の動きとして、御使い礼拝まであったほどです(コロサイ 2:18)。ペテロが第二の手紙で、御使いが勢いと力があると話しています(2:11)。御使いに会っている人々が、倒れて死にそうになっていることを思い出してください。ローマ兵は、イエス様がよみがえられて、そこにいた御使いの近くで固まってしまいました。そして、使徒ヨハネは、御使いを見て、ひれ伏そうとさえしていました。御使いが、同じ神のしもべだとして、それを強く戒めましたが。

しかし、これらの力ある存在よりも、はるかに高い所に上られ、神の右に着座されたということです。「ピリ 2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」他の箇所では、「もろもろの天よりも高く上られた方」とあります(エペ 4:10)。

けれども、イエス様ご自身が、御使いのようにして現れる箇所があります。例えば、黙示録 1 章で、ヨハネに現れた御姿は、ダニエル書 10 章に出てくる、ダニエルが倒れて死んだようになってしまった、栄光ある御使いと同じ姿です。ですから、こう考えるのです。「イエスが、このように栄光ある姿で現れた。御使いのようだ。」このようにして、イエスご自身が、全く御使いとは次元の違う、はるか高い所に、いと高き方の大いなるところに座しておられることを忘れてしまうのです。

あるクリスチャンの友人が、私に話してくれたことがあります。彼は牧師の息子。信仰を本当にまだ持っていないとき、中学生の時までは、イエス様が坂本竜馬のような存在だったと言います。自分にとって坂本竜馬は、英雄です。そのような英雄的な存在だとだけ思っていました。意外に、イ

イエスはすばらしいと言っている、その方がはたして、聖書に啓示されている御子の姿なのか？という、そうではない時がありますね。主の名を唱えても、主を知らないことはあるのです。主は、はるかにすぐれた方です。

## 2C 御子への礼拝 5-6

<sup>5</sup>神はいったい、どの御使いに向かって言われたでしょうか。「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」と。またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と。<sup>6</sup>そのうえ、この長子をこの世界に送られたとき、神はこう言われました。「神のすべての御使いよ、彼にひれ伏せ。」

決定的な違いは、イエス様が、神の独り子であるということです。「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」とあります。これは詩篇第二篇からですが、パウロは使徒の働き13章、ピシディアのアンティオキアの会堂における説教で、ここをイエス様のよみがえりの箇所として教えています。ロマ1章には、「1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」とありますね。次に出てくる、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」というのは、ダビデに対する神の約束です。この方がとこしえに治めることを教えられています。このように、神の世継ぎの子であります。

どんなに力強い存在に見えようが、御使いたちはあくまでも、神に仕える存在です。ここにあるように、「神のすべての御使いよ、彼にひれ伏せ。」とあるのです。御使いは、御子を礼拝する存在であっても、礼拝を受ける存在ではないのです。黙示録では、それがはっきりとしています。無数の御使いが、主なるイエス様を礼拝しているのです。

6節に、「長子」とありますね。これは、イエス様は神の御子であります、キリストにある者が御霊によって生まれて、神の子どもに養子縁組になります。それで、イエス様が私たちに兄弟とまで呼んでくださり、私たちの長子になってくださったのです。これは2章に詳しく出てきますので、その時に学びましょう。

## 2B 王としもべ 7-12

### 1C 油注がれた王 7-9

<sup>7</sup>また、御使いについては、「神は御使いたちを風とし、仕える者たちを燃える炎とされる」と言われましたが、<sup>8</sup>御子については、こう言われました。「神よ。あなたの王座は世々限りなく、あなたの王国の杖は公正の杖。<sup>9</sup>あなたは義を愛し、不法を憎む。それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油で、あなたに油を注がれた。あなたに並ぶだれよりも多く。」

御使いと御子との違いです。御使いについて、風として、燃える炎とするということですが、神が

御使いを造られたということですね。コロサイ書には、これら御使いが御子によって造られていることを教えています。「コロ 1:16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、御子にあって造られたからです。万物は御子によって造られ、御子のために造られました。」

御使いが造られた者であるのに対して、御子はどうですか？まず、ここでの主語は、父なる神です。神ご自身が、8節において、「神よ」と呼んでいます。「Iヨハ5:20 私たちは真実な方のうちに、その御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」ここでもヨハネは、イエスさまが、神ご自身であることを明言しています。

そして、この引用している詩篇の箇所は、ソロモン王の豊かで、平和な統治をほめたたえているものです。しかし、途中から、ソロモン本人を越えて、ダビデの子キリストの統治をほめたたえています。その統治はとこしえである。そして、公正である。義を愛して不正を憎みます。そして、神はこの方の統治を喜ばれ、油注ぎを行われています。まさに、これは神の国における王の姿であり、御使いが仕える者とは大違いです。

## 2C 天地の一新 10-12

今は、主が再臨されてからの地上における王国の姿であります。次はその後の新天新地の姿です。

<sup>10</sup> またこう言われました。「主よ。あなたははじめに地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。<sup>11</sup> これらのものは滅びます。しかし、あなたはいつまでもながえられます。すべてのものは、衣のようにすり切れます。<sup>12</sup> あなたがそれらを外套のように巻き上げると、それらは衣のように取り替えられてしまいます。しかし、あなたは変わることがなく、あなたの年は尽きることがありません。」

御子が、天地を創造された主ご自身であることが明らかにされています。先ほど、「力あるみことばによって万物を保っておられる」とありました。では、主がみこころであれば、いつでも万物を崩壊させることができます。そして、そのことを行われる時があることを、聖書は預言しています。「IIペテ 3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。」御子は服を着替えるかのように、今の天地を脱ぎ去り、後の天地を身に着けるのです。そうやって、天地が過ぎ去り、新しい天と新しい地が変わるのです。

そして、この方だけは変わらずに生きておられます。天地が過ぎ去っても、この方は全く、少しも影響を受けることはないのです。

### 3B 奉仕する霊 13-14

ですから、この方は神を父とする御子であられ、世を正義をもって治める方であり、天地が過ぎ去っても、ご自身は全く影響される、永遠に生きておられる方だということです。

<sup>13</sup> いったいどの御使いに向かって、神はこう言われたでしょうか。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで」と。

先ほど語っていたことですね。主は神の右の座に着いておられます。このことを御使いに対して、神が言われたことは一度もありません。

<sup>14</sup> 御使いはみな、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされているわけではありませんか。

御使いについての定義と働きです。定義は、仕える霊であるということです。著者が引用した、いろいろな箇所にもそのことが書いてありました。

そして次が大事ですが、「救いを受け継ぐことになる人々に仕えるために遣わされている」ということです。御使いは、神に仕えているだけでなく、救われている人々にも仕えているということです。これから、2章でイエス様が人となって苦しまれることが書かれていますが、思い出してください、イエス様がゲッセマネの園で苦しみ悶えられた時に、御使いが助けました。同じように、この方に連なる者たちにも、御使いが助けてくれるのです。

このようにして、御子は、御使いとは比べ物にならない存在であることを明らかにしました。私たちがイエスを信じているという時に、はたしてこの方をそのまま信じているでしょうか？それとも、数あるすばらしい人々の中に、うもれてしまっていやしないか？主が全てを支配される王です。けれども、自分で仕切っていることはないか？イエス様が全てを造られ、それを保っておられる方です。なのに、この方が自分を支えていることを忘れていないか？イエス様をイエス様としてあがめるのです。It's all about Jesus!